

特101

495

音譜付
か

新作 琵琶歌



目録

常陸丸	春日野
廣瀬中佐	石童丸
徳田西中尉	義士の歌
乃木大将	白虎隊
明治天皇	

快樂文庫

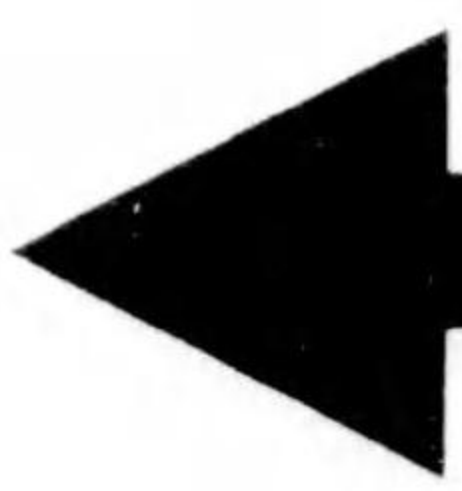
第二篇



274	
	169



始

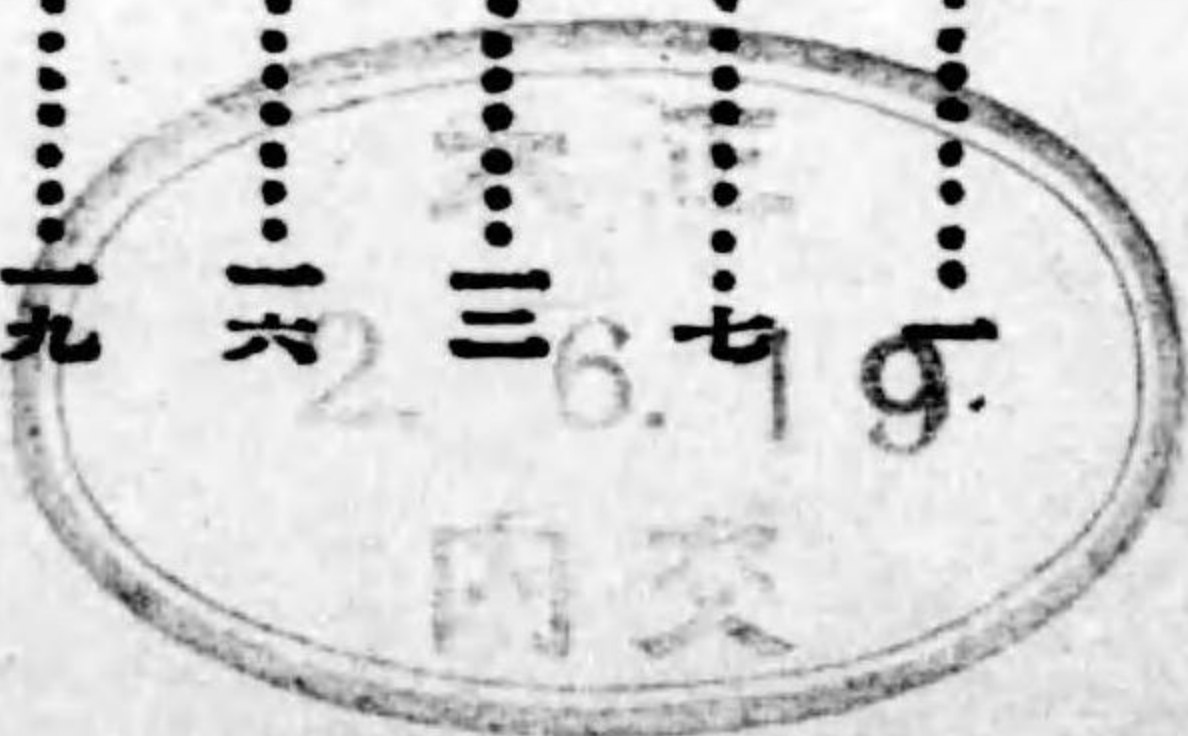


特101
495

(1) 次 目

目 次

城 <small>しろ</small>	大 <small>おほ</small>	山 <small>やま</small>	松 <small>まつ</small>	徳木田 <small>徳木田</small>	乃 <small>の</small>	明 <small>あき</small>
高 <small>たか</small>	源 <small>げん</small>	科 <small>しなの</small>	の	航空 <small>かうくう</small>	木 <small>き</small>	治 <small>ち</small>
山 <small>やま</small>	吾 <small>ご</small>	別 <small>わか</small>	廊 <small>らう</small>	の犠牲 <small>いけにへ</small>	將 <small>しょう</small>	天 <small>てん</small>
……	……	……	下 <small>か</small>	……	軍 <small>ぐん</small>	皇 <small>わう</small>
(それ達人は大観す)……	(會稽の君辱雪ぐ六の花)……	(俱不戴天の君の仇)……	(塵も動がす長閑なる)……	(霞こめたる遠山の)……	(壯烈宇内を震撼し)……	(蜻蛉の海に風騒ぐ)……
……二五	……二二	……一九	……二六	……二三	……二七	……一九



(3) 次 目

本	月	川	旅	俊	扇	常	臺
能	下	中	順	の	陸	灣	
寺……	陣……	島……	口……	寬……	的……	丸……	入……
(麻と亂るゝ戰國の)……………七四	(宵の篝火影失せて)……………七三	(天文二十三年秋の中ば)……………七一	(皇のみあづ輝く光には)……………七〇	(あだ守る筑紫の果て)……………六八	(四國屋島の荒磯に)……………六六	(征露の軍やうくに)……………六三	(皇の稜威は)……………六一

—(をばり)—

次 目 (2)

別	石	不	白	廣	吹	王	櫻	武
れ	童	如	虎	瀬	雪	照	藏	藏
の	國	歌	の	佐	敵	君	狩	野
歌……	丸……	歸……	隊……	佐……	敵……	君……	狩……	野……
(共にながめし月花も)……………五九	(月にむら雲花に風)……………五二	(霽れ間すくなき五月雨)……………四九	(花は櫻木人は武士)……………四三	(七たびも生返り)……………三八	(力山を抜き氣世を蓋ふ)……………三五	(問はず語り誰きけとて)……………三三	(霞たなびく山々の)……………三〇	(むさし野に草はしなぐ)……………二六

曲 譜 の 解

○ 大千として最も大なる聲

、 中干として地聲より稍大なる聲

地 吟者の普通の音聲

× 崩れと稱して棒讀にして力をこむる

「 吟替り、艶を加味して吟す

「 切り、謠ひ切る

一 平らか

△ 震聲引下げ終に上る

新 作 琵 琶 歌

四 絃 韻 松 撰

明 治 天 皇

^地蜻蛉の海に風騒ぐ、嘉永六年水無月は、上の三日の拂曉。いと仄暗
 き湘南の、狭霧置めたる峯巒は薄紗被ぐごとくにて、沖の鷗の夢破
 れ、何を目的か白浪の、渚に寄るか鳥影に、騰る一朵の黒烟、八重
 明治 天皇

明治天皇

の汐路を越ゆる來の、見聞慣れざる異邦の使節を搭せし艤舳、江戸
 の灣に程近く、雄姿現す以降は、葵の幹の根はゆるみ、「葉毎に枯れ
 て霜深く、秋風颯と一陣、瀬見の小川に霧霽れて。」慶應三年丁卯、
 睦月の中かとよ、孝明天皇第二の皇子に、在します、睦仁親王殿
 下には、皇孝の御大志紹參らせて、御踐祚の大典擧げ給へば、征夷
 將軍慶喜は、流れは遠き徳川の水汚さじと大悟して、三百餘年握り
 たる印綬節刀諸共に、謹み畏れ大政を、奉還なして忝順す』世は王

政に復古して、光り輝く日の御旗、曠古の大業緒につき給ひ、五ヶ
 條の御誓文、蒼生に下し玉ふぞいと畏こく、治國平には大御心、夙
 夜やすまるひまもなし、時に鳳算二八なり、さあれど鴻徳允武の御
 英姿は、世の刈菰を攘はせて、明治と改元あらせられ、民を安んじ
 國富ませ、威は萬邦に輝かし、甲午甲辰兩役は、列國環視の其中に
 世界の戦史に比類なき、屢々大捷得玉ひて、勇武智仁を示しつゝ、
 宇内に洪範垂れさせ給ひ、皇謨悠遠比ひなく、御懿徳宏業かぞへ奉

明治天皇

明治天皇

らば筆に及ばし紙つきす、たゞこれ塵餘の一だに記しまつるぞ畏
けれ

子等はみな戦の庭に出ではて

翁やひとり山田もるらむ

御製の和歌を拜しなば、誰かは涙にくれざらむ。『賤の伏家に起臥の
うなひ童にいたるまで、君の恵みにうるほひて、聖壽無窮を祈り奉
れるかひもなく、玉の宮居は漠々と妖しき雲におほはれて、日月た

めに光なく、世は仄闇くなり「鼻」時しも明治四十五年、文月の二
十日突として、陛下御不豫と傳はれば、あなやとばかり蒼生は、た
い恐愕に忙然と、互ひに面凝視のみ、されど斯くては果じと蒼生は、
恰ら喋し合ふ如く、此處の神社、彼處の佛閣に、祈願參籠懇ろと、
御惱に代ゆる我命、赤心さゝげ祈らぬ者こそなかりける』殊に皇城
の廣苑の下に集へる、老若の男女は、苦熱に身をば爛らして、毛髮
炎と化するとも、假しや此場に玉の緒は、断れなば断れよ、皇の、

明治天皇

明治天皇

御惱ごのううすらぎ玉たまはれと、迸とほしり出いす赤心まごころは乾坤けんこん爲ためめに搖ゆげとも、神靈しんれい
 天てんを急いそがれて、其月そのつき末すまの三十日にち、國母こくは陛下へいかを始はじめめ奉まうり、下六千萬しもまんの
 蒼生たみくさが縋すがりまつれど衰龍こんりうの、御袖みそで拂はらひて、哀かなしくも龍駕りうが御登遐ごとうがあら
 せらる×××」身みも代よもあらぬ悲哀かなし哀あはれに、億兆おくてうひとしく平伏ひれふして、暫しばしが程ほど
 は慟どう哭くに。『山嶽さんかく搖ゆぎ動うごせど、世よは諒闇りやうあんの神かみさびて天地てんち寂漠じやくはく聲こゑもなく、
 思おもひ廻まはせば現世うつよは、哀かなしき事ことはかづあれど、これに優まさしたる悲かなみは
 我わが一だい代だいによもあらし、君きみの齡ふはひの永ながかれと禱いのれる其掌そのては、今いまはしも、

遙はるかに拜はいす桃山ももやまの御空みそらに對むかひ額ぬかづきて、朝あさな夕ゆふなに御遺業ごゐげふをしたひ
 まつるぞ哀かなしけれ、切したひまつるぞ哀かなしけれ。

乃木大将

四 絃 松 韻 作

壯烈さうれつ字内じないを震しん駭がいし、道義だうぎは世界せかいの範はんとなり、赤誠せきせい人を動ゆがせし、陸
 軍ぐん大将たいしやう乃木希典のぎのぞは、神去かみさり在まし先帝せんていの、御登遐ごとうがありし其日そのひより、龍
 駕りかに殉しひまつらんと、堅かたく心こころの臍はらしめて、永久とほの行幸みゆきのいでまし
 來きたらん日ひをぞ待まちにける」一死報國しはうこくじんちゆう盡忠じんちゆうの、道みちを逆たどるは武夫ぶふうの、恒つねと
 乃木大将

乃木大將

しいへと希典が、心に死をば誓ひしは、過る明治は十年の春まだ寒
 き如月に、小倉の豺貅引率し、國の亂を鎮めんと、死生の間を出入
 し、紛骨碎身、忠戦を勵みし効もなく、軍旗を敵手に褫はれて、い
 たくも心に恥らひつ、一死引責潔よく、計る自盡も屢々に、劍霸握
 ることあれど、兎角に死處のあらざれば、心悶えて懊惱と月日數多
 を過す中、日清日露の二度の役、硝烟彈雨に身を曝らし、馬革に屍
 つつまんと、心矢猛に焦けるが、扱て徒らに死ねもせず、旅順の役

乃木大將

こそ潔よく、死すべき場所と思ひきや、公達二人は失へど、功績は
 高く爾靈の山、譽は其身に輝きて、茲にも死處を失ひて、心私かに
 樂まず、凱旋なせば程もなく、優詔下りて辭ふに難く、華胄の子弟
 を教育の重任荷へばいと猶、骸骨空しく乞ひかねて、去雁燕來幾
 月日、思はず過す其中に、頃は諒闇長月の、中の三日となりける』
 時維れ輜車に殯宮を、いでまし遠く桃山に、發はせ給ふ哀しの宵、
 空に罩めたる愁雲の間をを漏し月細く、啣く千草の蟲音も、此悲み

乃木大將

を奏づらめ、折しもあれや神寂し、天地に響く火砲の音、これぞ永
遠の行幸の計せなり」希典屹と容をば正して端座黙禱し、遙かに拜
す殯宮のあなたの御空に對座ひ、

うつし世を神去まし、大君の

御跡したひて我はゆくなり

言ひもあへず、水やしたゝる、軍刀の鞘を拂ひて引まはす、我、
我腹一文字、返す又は咽元をグサとばかりに、掻き切りて、そのま

前にと伏にける」夫人静子は傍に、夫の最期を打みやり、燥ける
心押しづめ、元より覺悟のことにしあれば、豫て準備の懐刀を徐か
に拿りて前に置き、

いでまして歸ります日となしと聞く

今日の行幸にあふぞ哀しき

水莖の跡麗はしくかき遺す和歌一首、やをら其身は君と夫とに殉ひ
て、天晴自害なしづるは寔にや烈女の鑑なり」流す夫妻の其血沙濁

乃木大將

航空の犠牲

り江に浮きて頼めぬ人心、洗ひ清めん心かも』
樹々の紅葉てりかへる旭輝く日の本の精氣はつきじ幾世まで、
坤底に朽つるとも、其名はつきじ幾世まで。

木村中尉 航空の犠牲
德田中尉

翠 葉 作

霰こめたる遠山の裾を繞れる野面には、千々の若草萌えいで、
待ち顔に翠しき、梢の花のほゝ笑めば、禽も長閑に唄ふらく、
春や、
、酣けし大正の、二年三月二十八日、彌生の空に羽を伸せる、
軍事

航空の犠牲

演習の行はれ、
の野邊の牙營より、眞一文字に空中を翔けりて着陸や青山の、
群がる數萬の、人々口々に、喝采と斗り褒め讃へ、喜び迎へし空界
の丈夫多き其中に、一層めだつ二勇士は、砲兵中尉の官職を帯ぶる
は、木村鈴四郎、歩兵科より特撰したる今一人、姓は德田に名は金
一、階に技倆は長けぬれど、年未だ若き白面の、前途多囑の將校な
り、今や任務の半ば了へ、卒ちや牙營に歸らんと、再び乗るは、武

航空の犠牲

烈理雄の、地單葉飛行機燥縦し、轉把巧に動かせば、モーター發動力の音凄じ
く、こくうはる虚空遙かに舞ひ騰り、おくれさきだつおくれさきだつ、行く雲と行く雲と、天の御原を天の御原を
競ひつゝ、入間の空に入間の空に翔けゆける、雄姿堂々雄姿堂々勇ましく、魁なせる魁なせる武烈
理雄の、跡に跡に續くは徳川式の一二三、其數併せて其數併せて四飛行機、雁行な雁行な
してまつしぐら、霞を破り霞を破り雲を衝き、入間の里を入間の里を瞰下して、早や程早や程
もなし所澤、牙營に残る牙營に残る將校等、望樓高く望樓高くうち登り、板橋田無板橋田無二街
道あなたの空を展望し、此勇ましき此勇ましき空界の、若殿原の若殿原の着陸を、今や今や

航空の犠牲

遅しと松井村。時しも正午の頃かとよ、地陸を放るゝ三百の米突保ち
武烈理雄は、兩翼張れる兩翼張れる大鵬の、風を切りつゝ風を切りつゝ翺翔するが如なり、
折しもあれや、風伯の風伯の、何を怒るか何を怒るか渦まける、一陣颯と一陣颯と怪の風、二
中尉の勇姿痛むかアナ無殘、武式の飛行機武式の飛行機したゝかに、左翼を搏つ左翼を搏つ
て逆まに、筋斗うたせば筋斗うたせば争でかに、防がん術は防がん術はあらずして、あなや
と見る間に武烈理雄は、いと恐ろしきいと恐ろしき音響を、此世の名残り此世の名残りと眞逆
に、急轉直下の急轉直下の其状は、何に比喩へん何に比喩へん物もなく「哀れ果敢なき現世
航空の犠牲

松の廊下

の、生者必滅の理は眞のあたり』さしもに雄姿を空に誇りたる。大
 鵬の如き武烈理雄は、見る影もなく微塵となりて粉碎し、木村中尉
 は固く握りし轉把の其手は、死すとも放さずに、徳田中尉は拳をば
 確かと握り、頭腦は碎け肉破れ、英魂遠く幽冥の、空に飛び去り、
 骸は茶毘の烟と消ゆるとも、航空界に犠牲の多大の貢献捧げたる
 其功績は末世まで、語り傳へてつきざらむ、語り傳へて盡ざらむ。

松の廊下

松の廊下

塵も動かぬ長閑なる、静けき御宇は東山、人皇百十二代に在します、
 叡聖允武の皇を、上に戴く柳營は大樹の枝葉いと茂り。國を三つ葉
 の花葵、照日のめぐみ色深き、七重八重咲き九重の京の都をいでま
 しの、雲井に侍べる貴人は、帝の叡慮齎らせて、花の東へ御下向と、
 治定ありける其日より、時の大樹に在します、五代の將軍綱吉公、
 頼多の諸侯ある中に、敕使歡待饗應の、重き任命を給ひしは、淺
 野と伊達の二侯にて、凡てを指揮し教ゆるは、古典禮範精通の、首

松の廊下

席高家の一人にて、貪婪卑吝と聞えある、吉良上野介義英なり、伊
 達は苞直に上野と、結べど内匠長矩は、清廉潔白贈賄の邪ま道を辿
 らねば、上野私かに、怡ばす、權威を笠に何やかと、強面なせるそ
 れのみか、忍ぶに難き凌辱は、武門の慣ひとは是非もなく、一、
 浅野内匠の胸の裡、家をも身をも顧みず、たゞ一討と上野を、松の
 廊下に襲へども、拙なき武運が逸したり、あゝいかにとやせん、春
 の日の申刻下りの夕まぐれ。本意を遂げず、空しくも、田村屋敷に

散らくと、音なくふるや花咲雪、恨を吞みて長矩が、のこす筐の
 筆の跡、惜む名残は春ならで、惜む名残は春ならで。

山科の哀別

俱不戴天の君の仇、敵の油断のあらざれば、暫し銳氣を山科の、月
 に憧がれ夜を徹し、花に戯れ香に迷ひ、春の胡蝶のひらくと、浮
 かるゝさまは他愛なく、京の島原かたばめや、狭斜の巷に出つ入り
 つ、浮大盡と名も高く、痴果の如き其人は、鬼神も哭す盡忠の、智

山科の哀別

山科の哀別

畧勝れて畜積し、抽してもつきぬ内藏助、萬嶽膝下に崩るゝも、泰
 然動がぬ大石の、心の中を探らんと、智恵もさかしき猿橋や、其他
 まつはる敵よりの、間者欺く苦肉の策、左右に美人膝の前、並べ列
 らねし肉林や、酒の泉に飲食は、無間地獄の苛責より、いと猶辛き
 思ひをば、誰に語らん語るべき、たゞ浮々と浮草の葉末に宿る露の
 玉、やがて消えゆく身なれども、田畠を拓き苗を植へ、東へ下る状
 もなく装へど未だ足らざるか、いとしの妻の縁さり心を鬼に恩愛の

絆にからむ態もなく、我子を添へて母までも、家を遂ひたる、没義
 道は、寔に忠孝の兩道は踏めぬものぞよ内藏助、さしもに固き鐵腸
 も、寸断さるゝ思ひなり、寸断さるゝ思ひなり。

大 高 源 吾

會稽の君辱雪ぐ六の花、散るや降りつむ大江戸の、大路小路のけじ
 めなく、皆な一樣の銀世界隋眠酣陸夢破り、士氣を鼓舞せし元祿も、
 はや押詰る十五年、月は師走の中四日、月こそ違へ日は同じ、去歲

大 高 源 吾

大 高 源 吾

の彌生に失せ給ふ君の御無念受つきて、君に殉ふ今宵こそ、怨敵吉
 良の御首を、打つて爵憤はらさんと、勇みに勇む丈夫は、丹心義膽
 の赤穂武士、其數併せて四十七、死出の山路は諸共に、皆な一齊の
 打扮にて、雪の夜路の音もなく、天地寂漠江東の、流れに架せし二
 州橋、渡れば速しや歲月日、經つは一年九の月、時運到來松坂町、
 警家の門に殺倒せり、斯時盟主内藏助手配萬端遠算なく、無辜の隣
 人痛めじと、傍杖防ぐ註進の役に探みし大丈夫は、大高源君忠雄と

大 高 源 吾

て、文武二道に秀でたる、最と風流の雅男にて、使命を受けて、葛然、
 隣館本多の門外に、夜襲の趣意を大音に、呼はる聲は勇まれて、雄
 叫び猛く吉良の門、物の美事に打ち破り、數多の味方と諸共に、こ
 み入り、討入れば、驚破やと斗り、吉良の衛士爰を先途と、獅子
 奮進の勢ひに防ぎ戦ひ、此處や彼處に火花散り、奮闘果ていあらざ
 りき、此時源吾は、三四の敵を斬り伏せて、かへり血浴びて朱に染
 み、名もなき端武者眼にかけず、目的すは怨敵上野と、猶も奥にと

大 高 源 香

進みゆく、折××××××××××から背後××××××××××に聲ありて、我××××××××××俳名××××××××××を呼ぶ人あり、何者××××××××××やら
 んと打見××××××××××れば、隣××××××××××れる庭××××××××××の松ケ枝××××××××××に、攀××××××××××ちて瞰××××××××××下す、裱衣××××××××××圓××××××××××顚××××××××××の其
 姿××××××××××、紛××××××××××ふかたなき××××××××××俳友××××××××××の、寶井××××××××××其角××××××××××昨日××××××××××の、無禮××××××××××を謝××××××××××して恐縮××××××××××す、
 源吾見聞××××××××××て打笑××××××××××ひ、心××××××××××にかけし××××××××××さまもなく、

我雪と思へば軽し笠の上

月雪の中や命の棄て所

互地ひにかはす風流、名句交はして、其まゝに奥の方にと走り行く。(略下)

城 山

勝 海 舟 作

夫れ達人は大觀す、拔山蓋世の勇あるも、榮枯は夢か幻か、大隅山
 の狩倉に、真如の月の影清く、無念無想を觀すらん、今を怒るか
 かり猪の、俄に激する數千騎、勇みに勇む逸り雄の、騎虎の勢一徹
 に、留り難きぞ是非もなし、唯身一つを打ち捨て、若殿原に酬ひ
 なん、明治十年の秋の末、諸手の軍打ち破れ、討ちつ討たれつ應て
 散る、霜の紅葉の紅の、血汐に染めど願みぬ、薩摩武夫の雄叫びに、

城 山

打○ち○散○る○玉○は○板○屋○打○つ○、
霧○手○走○る○如○く○に○て○、
面○を○む○け○む○方○ぞ○な○き○、
木○笥○に○響○く○関○の○聲○、
百○の○雷○一○時○に○、
落○つ○る○が○如○き○有○様○を○、
隆○盛○打○ち○
見○て○北○叟○笑○み○、
あ○な○勇○ま○し○の○人○々○や○、
亥○の○年○此○の○方○養○ひ○し○、
腕○の○力○
も○試○み○て○、
心○に○残○る○事○も○な○し○、
い○ざ○諸○共○に○塵○の○世○を○、
脱○れ○出○で○む○は

此時と

孤軍奮闘衝圍還

一百里程壘壁間

我劔既催吾馬斃

秋風埋骨故郷山

地
たゞ一言を名残にて、
桐野村田を始めとし、
宗徒の輩もろともに、

煙と消えし丈夫の「
切
心の中こそ勇ましけれ」
官軍之を望み見て、
昨

日は陸軍大將と仰がれ、
吟替
君の寵愛世の覚え、
比ひなかりし英雄も、

今日は敢なく岩崎の、
山下露と消えはて、
移れば替る世の中の、

無常を深く感じつゝ、
無量の思ひ胸に充ち、
唯悄然と隊伍を整へ、

目と目を見合すばかりなり、
折しもあれや吹き下す、
城山松の夕嵐

中干切り
岩間に掬ぶ谷川の、
地
無常の聲も何となく、
悲鳴するかと聞きなされ

編 山

武藏野 切服の袖を絞らぬものはなかりけり。

武藏野

島津新齊公作

武藏野に、草は科々多けれど、摘む菜にすれば扱ても少し、皆人は
若き時よりたゞ、徒ら事に日をくらし、才智藝能なき人は、寶の山
に入りながら、空しく返るが如くなり、偶々此世に人間衆生と生れ
来て、眞如の玉を磨かすば、人と生れし甲斐ぞなき、人よりは淺く
思はれて、犬の年経る如くにて、朽ち果つるこそ無念なれ、復たい

つ○の○世○の○、何○日○の○時○に○か○磨○く○べ○き○、頼○ま○れ○ぬ○世○に○も○あ○る○か○な○月○鼠○、

騒○ぐ○草○葉○の○露○の○身○な○れ○ば○、譬○ひ○高○位○長○者○の○身○と○も○な○り○、七○珍○萬○寶○充

々○て○、榮○華○に○ほ○こ○る○樂○し○み○も○、一○夜○の○夢○の○如○く○な○り○、觀○樂○極○り○て○哀

情○多○し○と○、古○人○の○文○に○も○記○さ○る○、然○れ○ば○こ○そ○、生○々○世○々○の○樂○し○み

も○、心○の○中○の○月○や○花○、こ○れ○を○樂○む○人○も○又○、會○者○定○離○、生○者○必○滅○の○世

の○慣○ひ○、春○去○り○秋○は○蟬○の○聲○、さ○て○も○果○敢○な○き○浮○世○か○な○、世○の○中○を○、

思○へ○ば○夢○か○稻○妻○の○閃○と○す○る○間○の○か○た○ら○ひ○も○、慳○貪○愚○痴○は○迷○ひ○な○り○、

武藏野

櫻 狩

引き寄せて結べば草のいほりにて、切解れば舊の野原なり。

櫻

狩

古

歌

震地たなびく山々の、盛りの花を眺めむと、嘶く駒に鞍こま置せ、東雲近
く浅茅生の、柴の庵をた一人、切峙こま放れし鶯うぐいすの、聲をきつ、つ、春の
野に、萌ゆる草葉の露分けて、進こまむる駒の鬣こまに、地亂れかゝれる青柳
の、糸をつたふて朝風の吹ともなしに、ゆかし香を、送りて我を誘
ふかと、思ふ斗りに遠近の、切梢は雪か白雲か、地景色妙なる其様に、

浮世の善悪も打ち忘れ、暫時木蔭に立ちよりて、墨斗の毛管を取り
あへず、

薄命能伸旬日壽

納言姓字胃此花

零丁借宿平忠度

哈詠恨風源義家

志賀浦荒翻二暖雪

奈良都古簇二香霞

南朝天子今何在

欲望二芳山路更踪

と書さつゝけたる水莖を、跡にのこして花の香を、盛りのまゝにと

櫻 狩

翻 狩

めくれば、爰は盛をはやすぎて、散り敷花は野に畑に、飛びかふ蝶
 の如くなり、嗚呼世の中は鳥羽玉の、夢か現か昨日まで、榮へしも
 のは今日は早や、見る影もなくなり果て、浮世の中と嘆ちつ、
 今さらそれと夕告の、鐘の音さへ身に泌みて、昔を偲ぶ人もあらむ、
 然は然りながら花の木も、又來む春に循りあひ、貧しき人もいつま
 でか、時めくことのなからめや、榮枯盛衰は世の習ひ、たゞ玉銚の
 ことはりを、逆らむ外はなかりけり、いざ歸らむと乗る駒の、手綱

かいくる其袖に、花の吹雪はかゝりけり、花の吹雪はかゝりけり。

王 照 君

古 歌

問はず語り、たれ聞けとてかうち侘る、身の憂さを知れ山時鳥軒の
 草、忍ぶとすれど秋更けて、よはひはてたる蟲と我かな、それ一生
 の別には、露の命も惜からず、風にまかする窓のともし火、悲み骨
 髓に徹りきて、形は憔悴と衰へて、たゞ何事も妹背の契り、淺衣の
 うすきるにしと成り果て、あはれ果敢なき我身かな、一度君に別れ

王 照 君

ひとたびきり

王 照 君

ては、再び相逢ふこともなし、隔てつくせし千山萬水の雲、終夜心
 にかけて思へども、君に逢ふ世の夢にだに見ぬ、今世の中に物思ふ
 身は、我等ばかりと思へども、昔をつたへ聞く時は、王照君の其古
 へは、漢の帝の美人にて、御寵愛はたぐひない、殿上にもならび
 なく、洵に雲の上人にて、さしも優々しく在せしに、如何なる人の
 さかしらにや。胡國といへる遠國の夷の在所に、流され給ふぞ哀れ
 なる」

吹 雪 の 敵

作者 不詳

地 方山を抜き、氣世を蓋ふは、我が北門の鎮なる、歩兵第五聯隊なり、
 正巴と降りしきる、雪を馬前の塵と見て、拂ひつ進む二百餘騎、
 明治三十あまりて五歳の、初月末の東雲に、銚をたてたる霜柱、馬
 の蹄に蹴立て、向ふは何處雪の城、田代をさして急がる、おく
 れ先だつ世の人は、幸か不幸か、辛畑を、過ぎてぞ來つる田母木野
 を、眞白に染めて大峠、小峠風吹まくる、吹雪の音は武士の、取り

吹 雪 の 敵

吹雪の敵

地 弓弦の音の如、射出す白羽の雪の矢の、射抜かば射抜け我腕を、
 氷の劍霜の槍、突きつらぬかば突て見よ、忠勇義烈の此の腹を、如
 何なる艱苦も大君の、御爲と共に國のため、進め進めと下知すなる
 劍光霜もかがやきて、威風鋭き勇將の、下には弱卒あるべきぞ、渦
 まきかへす雪のあり、蹴るや吹雪の音凄く、霰の礫雪の丸、左手に
 拂ひ右手に受け、挑みたゝかふ其中に、寒風骨や切れにけむ、凍傷
 破れ迸る、血汐に雪も色をかへ、怯む模様も暫しにて、尙繰り出す

雪の渾、幾重ともなく取り圍み、黑白もわかすなりにけり、猛虎に
 おくれぬ將卒も、終には憩らう燧山、燃さむつま木もぬれはて、
 雪の露營に夜を更かし、假寝の夢もむすび兼ね、明けゆく空は猶し
 ろく、積れる雪は閉されつ、安木の森も長森も近しと聞けと乗る駒
 は、倒れ倒れてすゝみかね、無念やる方なくくも、再びこゝに日
 は暮れぬ、起き出で見ればあな哀れ、篋深にたいし矢の如く、髪は
 千筋に凍りつ、眼をひらき齒を噛みて、あへなくなりし兵もあり

吹雪の敵

廣瀬 中佐
國の爲め雪と戦ひ倒れても

いさはは高しむつの空

弓矢八幡神かけて、今日を限りの武運をも、守らせ給へ我は今、最後の隊伍整へて、亂れぬ列を世に止め、魔軍の圍み衝き破り、倒れて後に止まむのみ、倒れて後に止むのみく。

廣瀬 中佐

作者 不詳

七度も生き返りつゝ、夷をぞ攘はんころろ、我忘れめや、最後の歌

を小塚原、空しく忠義の鬼となりし、松蔭神靈の今爰に、又もあれ

ます軍神、勇める時は如月の、空さりげなく春の雪、降る宣戦の大

詔、征露の事の生りしより、武夫の拿りつたへたる梓弓、射るか彌

生の花と散り、露と消えしますすら夫の、多きが中に朝日子の、廣瀬

中佐の戦死は、傳へ聞くだに涙なり、頃は三月二十七日、港口閉鎖

の任務を帯び、福井丸に打ち乗りて、向ふは何處旅順口、百の矢叫

廣瀬 中佐

雷の、玉の霰と降る中を、怯めず臆せず決心隊

廣瀬 中佐

玉の緒のたゆるもやまじ敷島の

大和をのこの勤めつくまで

と詠みたる歌はまのあたり、捨る此身の屍を飾る錦と覺悟して、こ
 ゝろ指したる港口に、我と我が船打ち沈め、任務を終へぬ、いざ去
 らば、端艇卸せの命令に、兵士齊しく乗り移る、中佐も乗らんとし
 たりしが、見れば一人不足なり、兵士一人の玉の緒も、國の寶とか
 ねてより、部下を助はる仁愛の、情の聲を振り絞り、杉野兵曹長は
 吟替

廣瀬 中佐

一世義烈赤穂里

三代忠義楠氏門

あらざるか、呼べども答はなかりけり、杉野兵曹長はあらざるか、
 再び呼べども答なし、杉野兵曹長はあらざるか、呼ぶこと三たびに
 及べども、答ふるものは荒浪の、早くも甲板隠すまで、船は次第に
 沈みゆく、是までなりと飛び移る、刹那に敵弾飛び來り、中佐の頭
 上に破裂して、嗚呼廣瀬武夫六尺の軀、僅一片の肉塊を残して落花
 微塵となりけり、落花微塵となりけり、

白 虎 隊
憂 憤 投 身 薩 摩 灘
慷 慨 就 刑 小 塚 原

君が作りし唐詩の、正氣の歌の一節は、古人に恥ぢぬ赤誠を、其儘
こゝに軍神、花は櫻木武士の後の鑑となる神の、音も轟に残るらん
音も轟き残るらむ。

白 虎 隊

花は櫻木人は武士、散り際潔し敷島の、大和心を美し、爰に會藩順
逆を、誤り錦旗に及向ひて社稷乍ち亡ぶ秋、藩士の子弟は團結し白

白 虎 隊

虎隊とぞ名づけしは、日新館に撰抜の、紅顔有爲青年にて、年齢僅
か十五六、十七歳を頭とし、家父や慈母の膝の下、學びの窓に通ふ
身も、忠勇義烈の腕扼し、劔を拿つて慕然、首將の許に馳せつけて
藩に殉せんことを乞ふ、はや此時は若松の、城内あはれ兵は竭き、
残るは老木の梓弓、かよはき婦女子ばかりなり、今は主君の安危迫
り來ぬ、少年隊は雄々しくも、決死隊の左翼となり、戸の口原に打
ち向ひ、群る敵に斬つて入る、折しも吹くや荒風の、雨も一時に篠

白 虎 騷

を衝き、雷鳴山岳を震動し、忽ち放つ電光の、それにも勝る早業の
 閉く影は白虎の如、猛りに猛ける丈夫が、息をもつかず戦ふも、寄
 せ来る敵は群がりて、我は孤立の味方なり、僅に一方を斬りぬけて
 残れる生者十餘人、慶應戊辰八月の後の三日の東雲に、瀧澤峠の險
 を超え、數ヶ所の痛手に迸る、血汐の雨に袖絞る、加旃兵糧續かね
 ば、飢と疵とに疲れ果て、折れたる刀を杖にして、飯盛山に攀ち上
 り、遙かに見渡す鶴城は、黒き烟に包まれて、炎々天を焦すごと、

昨日に變る今日の様、あはれ望みも断れたりな、主君を始め奉り、
 家父や慈母に今生の、別れを告げんと跪き、涙ながらに伏し拜む、
 情緒亂れて絲の如、斯時、飯沼貞吉の、取り出したる短冊は、母の
 賜ひし和歌一首、此の世の別れと讀み上げて、我事こゝに止みたり
 な、最早何せん術なしと、忽ち光る一刀を、小脇にぐつと突き立て
 物の見事にひきまはす、篠田儀三郎も忽ちに、文天祥が正氣の
 歌、聲朗かに吟じけり、手疵に惱み昏睡と、其場に轉び伏居たる、

白 虎 騷

白 虎 隠

石田和助も此聲の、耳に通じやしたりけん、頭を擡げ莞爾と、我も
臨終の吟聲を、聞え上げんと高らかに、

人生自古誰無死 留取二丹心照汗青

と之も同じく天祥が、零丁洋の一節を、吟じ終るや一刀を、小脇に
いつと突きたてぬ、篠田は之を見るや否、秋水逆手に我喉、束も通
れと貫きぬ、地、扱又林八十治と、永瀬雄治の少年は、地、豫ねて交り深
れば、冥途も共にと抱き合ひ、エイと一聲刺違ふ、永瀬の鋒尖鈍り

やしけん、林は傍を見廻して、苦痛を忍び、手を舉げて介錯頼むと
乞ひければ、野村駒四郎は馳せ来り、婆娑と斗りに首打落し、返へ
す及は深く、腹一文字掻き切つて、哀れはかなく失にける、其他殘
れる青年輩も後れはせじと、諸肌を脱げば馨れる若木の花、夜半の
嵐の誘ひ来て、いとも美事の自害して、秋の錦と飾る山、染むる血
汐は唐錦、之れより前に戦没の、少年輩の屍を、拾ひ集めて、飯盛
の、山嶺高く建てられし、其碑銘は後の世の士氣を鼓舞する基なり

白 虎 隠

白 虎 隊

少年團結白虎隊

國步艱難成二堡塞

黃塵掩天白日暗

警報交至四海內

忽捲風雨大軍來

巨砲連發疆屍堆

白虎一隊自虎健

殺生過當何壯哉

衆寡不敵戰且卻

身裏二創瘡一口含藥

腹背皆敵今何行

杖劍間行攀二丘叡

南望二鶴城二黑煙颯

社稷己亡我事止

一死唯應償二君恩

十有六人心肝鐵

遙拜二鶴城二淚潛々

意氣從容屠腹死

嗚呼天何を丈夫の、義烈勇壯の行ひを、空しく暗に葬らん、空しく

暗に葬らむ。

不 如 歸

地 霽れ間少なきさみだれの、軒端の雫音絶へず、涙に曇る皐月空、雲
の、断れ間に片破れの、月影寂びて憂きことの、地變 茂る青葉の木隠れて

不 如 歸

不 如 歸

虚空遙かの一^{ひと}聲^{こゝろ}は、宙^{ちゆう}に迷^{まよ}ふか山^{やま}杜^{ほととぎす}鶉^{なくね}、啼^{なぐ}音^ね血^ち汐^{しほ}に彩^{いろど}れる、哀^あ史^い緋^ひ、
 く人^{ひと}々は、浪^{なみ}子^この媛^{ひめ}が痛^{いた}はしき、^地いと哀^あれな身^みの上^{うへ}を、同^{どう}情^{じやう}せぬ
 者^{もの}こそあ^あらざらめ、况^{いは}んや背^せ君^{きみ}の川^{かは}島^{しま}は、其^{その}名^なも猛^{たけ}き武^{たけ}男^をとて、去^ま
 ぬる甲^{こう}午^ごの戦^{たたかひ}に、波^{なみ}風^{かぜ}荒^あき黄^{くわう}海^{かい}の汐^{しほ}は烟^{けむ}に包^{つつ}まれて、大^{たい}清^{しん}國^{こく}の艦^{かん}隊^{たい}
 を轟^{くわう}沈^{ちん}なせし我^{わが}艦^ねは、數^{あまた}多^たの猛^も者^さのあ^ある中^{なか}に、天^{あつは}晴^はん勇^{ゆう}士^しと聞^きえた、
 る、姿^{すがた}容^{かたち}に似^にもやらぬ、世^よに珍^{めづ}らしの剛^{つはら}者^{もの}にて、負^て傷^{きづ}其^{その}身^みに蒙^{かうむ}りて
 吟 重^{いた}傷^で養^{やしな}ふ病^{びやう}院^{いん}の、寢^べ臺^だに軀^く幹^{かん}を横^{よこ}へど、夢^{ゆめ}に現^{うつ}つに妻^{つま}浪^{なみ}子^こ、^變いかい
 地

不 如 歸

はせしと思^{おも}ひ侘^わび、睡^{ねむ}ればいつも華^{くわ}胥^{しよ}ならで、妹^{いも}許^が行^りけと哀^あしやな
 荒^あむ家^か庭^{てい}の風^{かぜ}無^む情^{じやう}、連^{れん}理^りの枝^{えだ}は打^{うち}折^ぢられ、翼^{つばさ}比^ひべん由^{よし}もなく、いま
 はた甚^い麼^かに浪^{なみ}子^こ媛^{ひめ}、病^{やまひ}に細^{ほそ}る玉^{たま}の緒^{いと}は、赤^{あか}繩^{じゆ}の絲^{いと}と諸^{もろ}共^{とも}に、情^{なさ}け白^{しろ}
 髪^{かみ}の母^{はは}刀^は自^じに、弗^はと斗^{たう}り、斷^たちきられ、^地氷^{ひが}川^がの杜^{もり}の片^{かた}畔^{ほとり}、鼻^{しうとらう}中^{じやう}將^{かう}片^{かた}
 岡^{おか}の膝^{ひざ}に縋^{すが}りて、あへなくも、良^を人^{ひと}武^ぶ男^をの名^なを呼^よびて、漸^{しだ}次^じに細^{ほそ}る
 蟲^{むし}の呼^い吸^き、終^{つひ}に空^{そら}しく没^みりぬ、後^{のち}に至^{いた}りて斯^{かく}と知^しり、さしもの剛^{つは}
 者^{もの}川^が島^{しま}も、涙^{なみだ}に身^みも代^{しろ}もあ^あらずして、冥^{よみ}の旅^{たび}路^ぢは諸^{もろ}共^{とも}と、曩^{さき}日^に誓^{ちか}ひ
 不 如 歸

不 如 歸

い 逗 子 の 濱、約 を 踏 ま ん は 易 け れ ど、身 は 軍 籍 に あ る を 如 何 に せ ん、
 止 む な く 自 殺 は 歎 み ぬ れ ど、屹 と 心 を 決 め つ、利 達 榮 進 顧 み ず、
 地 青 山 の 奥 津 城 に、浪 子 慕 ひ て 墓 の 前、萬 感 胸 に 迫 り 來 つ、假 令
 浪 子 は 死 す る と も、浪 子 は 武 男 の 妻 な る よ、墓 標 の 文 字 は 片 岡 と 認
 せ ど も、武 男 の 眼 に は 歴 々 と、川 鳥 浪 子 と 讀 け る よ、言 つ、捧 ぐ る
 花 束 は、愛 の 誠 は 籠 る ら ん、愛 の 誠 は こ も る ら ん。

石 童 丸

石 童 丸

地 月 に む ら 雲 花 に 風、心 の ま ぐ に な ら ぬ こ そ、浮 世 に 棲 め る 慣 ひ な れ
 地 茲 に 筑 前 筑 後 肥 前 肥 後、大 隅 薩 摩 の 守 護 職 に、加 藤 重 氏 其 人 は、無
 情 を 感 じ 世 を 捨 て、諸 國 修 行 に 出 給 ふ、跡 に 残 り し 妻 や 子 は、思 ひ
 待 つ こ と 十 餘 年、父 上 高 野 に 在 り と き、石 童 丸 は 母 上 と、菅 の 小
 笠 を か た む け て、旅 の 勞 れ も 厭 ひ な く、漸 く 高 野 の か び ろ 宿、や ど
 り 給 ひ て、二 人 と も 翌 日 は 逢 は ん と 悦 ぶ も、女 人 禁 制 の 山 な れ ば、
 詮 方 な く も 母 上 を、麓 に 残 し ま ゐ ら せ て、石 童 丸 は たゞ 獨 り、心 細

石 童 丸

徑分けながら、峰の薬師や瀧不動、手を合せつゝ伏し拜み、寂しさ
 いはむかたなくも、其夜は其處に假り寝して、笠の屏風に腕枕、諸
 行無常と告渡る、鐘の音いとい身に泌みて、九百九十の寺々や、峰
 谷々の阿彌陀佛、菩薩を念じたづぬれど、父ぞと思ふ人はなく、三
 日二夜は早や過ぬ、麓の母を案ずれば、うしろに引るゝ心地して、
 地松吹風の音までも、母のこゑかと疑はれ、
 ほろ／＼と鳴く山鳥の聲きけば

父かと思ふ母かと思ふ

と行基菩薩の詠れたる、歌の心も思はれて、歩むともなく歩みつゝ
 無明の橋を越來れば、左に花を右に數珠、光明真言唱へつゝ、荇萱
 道心下り坂、見あげ見下す顔と顔、石童丸の振袖と、高祖の袖と纏
 れあひ、放れ難なく見えけるは、深き縁のあるならん、其時袖に絶
 りつき、あな、御僧よ御山の今道心を此われに、教へ給へと請ふさ
 まの、哀れに見ゆる幼子が、腰に佩たる脇差は、見覚えのある品の
 石 童 丸

石 童 丸

みか、花の顔月の眉、いづこか母に肖てあれば、いかにも不思議に
 堪へねども、疑と耐へて言へるやう、尋ぬる人の名を書きて、札場
 に建つれば逢ふことも、あらんと聞きし石童が、途方にくれしあり
 さまを、哀れと思ひ手を拿て、おのが住家に泣れ歸り、國は何處で
 名は何と、問はせ給へば石童は、せきくる涙押しいめ、國は筑紫の
 松浦潟、加藤左衛門重氏が、わすれ遺兒の石童と、聞より苳萱胸せ
 まり、おつ 落る涙をといめ得ず、いしどう 石童それと悟りけん、ちうま 若し父上に在ま

石 童 丸

さば、明かしてたべと前に寄り、後ろに廻り苳萱の、顔のぞき懇に、
 請はるゝ時の石童を、噫なつかしの我子よと、言はんとせしが、地 法の
 の教の背きかね、涙にうるむ顔反むけ、吟 汝が尋ぬる苳萱は、去年は
 長月秋のころ、空しくなりぬと曰へば、石童わつと泣伏すを、地 苳萱
 千々に慰めて、なみだ 涙は佛のためならず、ひとたび下りて母上に、このこと 此事
 いふて回向せよ、さ 諭す言葉の切なるに、いしどう 石童泣々き、わ 分けて、よも 麓に
 下り母に告げんと来て見れば、むじやう 茲にも無常の風荒び、いしどう 石童丸を待ち

石 童 丸

かねて、麓の野邊に枯残る、草葉の露と消え給ふ」地嗚呼父上に生き
 別れ、又母上に死別れ、天にも地にもたい一人、便りとするは姉は
 かり、逢ふて此事語らんと、歸りて見れば姉もまた、此世を去りて
 影もない、地變扱てもつれなき浮世哉、更けゆく夜半に霜[×]牙[×]て、×磯[×]山[×]松[×]
 は音もなく、千鳥繁鳴松浦渦、浪に漂ふ捨小舟、引人もなき石童は
 高野にありし其時に、地變憐み給ひし御僧より、外にたよるはなしと知
 り、再び登り苜萱の庵たづねて御弟子にと、請はれて苜萱是非もな
よたののは かるかや いほり みでし こ かるかやせひ

く、打つれたちて國々を、修業なしつゝ、美壽々かる信濃の國に入
 寂し、遺す蹟は名も高き彌陀の光りの善光寺、石童寺の本尊は、親
 子地藏に在すなり、親子の縁は斯までに、断ちてもきれぬものなる
 ぞ、今は昔の物語り、南無や大悲の地藏尊、切南無や大悲の地藏尊。

別 れ の 國 歌

共に眺めし月影も、今は屍の上にてる、光もいつか浮雲に、隔てら
 れつゝ野も山も、風肅々と腥き、新戦場は朧夜の、春とはいへど尙
 別れの國歌

別れの國歌

寒し、爰は戦後の奉天府、恩賜の繙常かけまくも、綾に長き皇國を
 護るはまれの負傷兵、重傷輕傷のその中に、悲壯悲慘をさはめしは
 野戰病院の手術臺に、鮮血淋漓と迸り、骨は碎けて肉破れ、見るに
 堪えざる重傷の、一兵卒は横はる、夜露を拂ふ青柳の、絲より脆き
 玉の緒をしばしなりとも繋がんと、軍醫はすゝみ懇に、應急手あて
 施して、誠を籠めて言へるやう、苦痛はいかに堪へ得るや、言ふべ
 き事のあらざるかと、優しき言葉や通じけん、苦痛に閉ぢし眼を開

別れの國歌

き、外に言ふべきこともなし、早く癒して國の爲め、再び戰場に立
 たしめよ、答ふる聲も微かにて(中畧)此の世の別れに君ケ代を奏す
 る聲もたへづくに、悲むが如く喜ぶが如く、或は高く又低く、苔の
 むすまでの七文字を、終ると共に忠魂は、天の一方に飛び去りて、
 残るは名のみ計りなり、これ此兵士は福知山、聯隊區より出身の、
 姓は杉山名は忠吉、國家の外に餘念なき、いと麗しくかぐはしき、
 最期を爰に遂げにけり(下畧)

臺 灣 入

臺 灣 入

四 村 天 四

皇^地のみるづは四方に輝きて、清國^{しんこく}遂に和議^{わぎ}を乞ひ、臺灣^{たいわん}島を献上^{けんじやう}し
 合戦^{がっせん}こゝに治まれる、君^{きみ}が御代^{ごよ}こそ目出^{めで}たけれ、臺^{たい}灣^{わん}島^{とう}の土^ど賊^{ぞく}共^{ども}、
 龍^{りゆう}車^{しや}に向^{むか}ふ蟻^{あき}螂^{ろう}の、斧^きを揮^{ふる}ふと聞^きえしかば、征討^{せいたう}の師^しをぞつかはさ
 る、近衛^{このゑ}兵^{へい}の精銳^{せいえい}を、率^{ひき}ゐて御渡海^{ごたうかい}めされしは、陸軍^{りくぐん}中將^{ちゆうじやう}大勳^{たいくん}位^{いた}北
 白川^{しろかは}の宮^{みや}として、金枝^{きんしき}玉葉^{ぎよく}の御身^{ごんみ}なり、三貂^{さんてん}角^{かく}の御上陸^{ごじやうりく}、幕營^{まくえい}ありし
 其^{その}の迹^{あと}に、木^きを削^くりてぞ誌^しさるゝ、炎熱^{えんねつ}熾^しくが如^{ごと}き日^ひに、三貂^{さんてん}角^{かく}の

常 陸 丸

池 邊 義 家

嶮^{けん}岨^そをば、馬^{うま}にも召^よさず越^こへたまひ、大^{たい}雨^{いう}頻^{しきり}に降^ふる時^{とき}も、ぬれにぞ
 濡^ぬれて進^{すす}まるゝ、士^し卒^{そつ}これに感^{かん}激^{げき}し、病^{びやう}兵^{へい}さへも立^たち上^あり、命^{いのち}惜^{おし}ま
 ず進^{すす}軍^{ぐん}す(中^{ちゆう}畧^{りやく}) 盛^{せい}功^{こう}威^い烈^{れつ}の後^{のち}世^よに、輝^かきわたるぞ有^あり難^{がた}き、北^{きた}白^{しろ}
 川^{かは}の水^{みづ}は逝^{かへ}きて歸^{かへ}らねど、月^{つき}影^{かげ}永^{なが}く澄^すみ渡^{わた}り、光^{ひかり}は世^よ々に流^{なが}るらん
 光^{ひかり}は世^よ々に流^{なが}るらん
 征^{せい}露^ろの軍^{ぐん}やうくに、進^{すす}みくゝて南^{なん}山^{ざん}の、嶮^{けん}岨^そも己^{おのれ}に打^うち破^{やぶ}り、音^ね

常 陸 丸

に聞えし要害の、旅順口も閉されて、鷲の棲むてふ満洲も、君が御
 稜威の旗風に、今は靡かぬ草もなし、心筑紫の島離れ、玄海灘のた
 い中に、吹く汐風に日の丸の、旗ひるがへす常陸丸、佐渡も續いて
 進み行く船路の果は遠からむ、何を荒ふる荒汐の、逆捲く中の黒烟
 り、たゞ一筋に走り来て、我を取り捲く敵の艦、こは何事と云ふ間
 もなく、亂射亂撃雨霰、進み逃れんひまもなし、千里を走る猛獸も
 水に入りては如何にせん、萬里を翺る大鵬も、浪には翼は折ぬべし

(中畧)

寔に誠忠の兵士が、十年の間朝夕に、磨き練へし日本刀、
 試さん敵を前に見て、遺恨の刃一と太刀も、報ひん時もなくばかり
 駒の蹄に満洲を、踏にじらんも夢なれや、烏拉爾貝加爾打ち越えむ、
 あらまし事も幻か、思へば無念の極みなり、嗚呼一聯隊の我勇士、
 水漬く屍と消えしかど、國に殉せし大丈夫が、清き其名は萬代も、
 響の洋に立つ浪の、絶ゆる時なく仰がれむ、末まで遠く流るらむ。

常 陸 丸

扇の的

扇の的

作者不詳

地 四國屋島の荒磯の濱で、源氏平家の戦に、源氏方の弓矢の譽、今の
 世までも記さるゝ、左もあれば、平家方より、沖なる船に扇を的に
 立てけるが、兎にも角にも彼の的、射らではかなふまじと宣へど、
 沖に立ちたる的なれば、誰とて御請いたす者もなし、爰に下野國の
 住人、那須與市宗高は、青年爰に十九歳、其頃名を得たる弓取なれ
 ば、心安く進み出で、御請いたし、御前遙かに引き下る(中畧)波打
 地 大干 下野國の

際に駈け出て、沖なる的を見渡せば、間十二町ばかりと打ち見えて
 中干 名残の浪は音高く、風は競ひて的定まらず、誠に射るに射られぬ次
 第一なり、されど又、武士の一度御請致せし上からは、兎にも角かも
 彼の的、射らでは叶ふまじと、小松原へぞ駈け上り(中畧) 宗高直
 地に駒引寄せ、打乗りて小松原を駈け下り、駒の手綱を搔繰て、海中
 に颯と駈け入り(中畧)矢聲をかけて放ちければ、願の功力の御威光
 かな、要際より弗と射切り、扇は空中へ舞ひ上る、沖には平家舷を
 扇の的

俊 寛

叩いていと感^{かん}じ入り、陸^{くわ}には源氏^{げんじ}轡^わをならべ、^切箆^{へら}を叩いて感^{かん}せぬ
ものはなかりける(中^{ちゆう}畧^{りやく})宗高^{そうかう}は外^{ぐわい}に功名^{こうめい}数多^{かずた}あれど斯^か程^{ほど}の功名^{こうめい}は始^{はじめ}
めてにて、名^なを末代^{まつだい}に残^{のこ}し置^おく、源氏^{げんじ}の御代^{みよ}こそ目^め出^でたけれ。

俊 寛

あだまもる、筑紫^{つくし}の果^{はて}の薩摩^{さつま}瀉^{がた}、鬼界^{きかい}ヶ島^{しま}の荒^{あらい}磯^{いそ}に、治承^{ちしやう}元^{げん}年^{ねん}夏^{なつ}五^{いつ}
月^{つき}、流^{なが}され給^{たま}ひし人^{ひと}々は、右^{みぎ}近^{こん}衛^ゑ少^{せう}將^{しやう}成^{なり}經^{つね}、檢^{けん}非^ひ違^{ちが}使^し平^{へい}入^い道^{だう}康^{かう}頼^{らい}、
法^{ほふ}勝^{しょう}寺^じ入^い道^{だう}俊^{しゆん}寛^{くわん}僧^{そう}都^との三^{さん}人^{にん}なり、^地憂^うき艱^{かん}難^{なん}を此^{この}島^{しま}に送^{おく}り給^{たま}ふ其中^{そのうち}に

俊 寛

中^{ちゆう}大^{だい}救^{きう}の命^{めい}をぞ傳^{つた}へらる、思^{おも}ひもかけぬ事^{こと}なれば、あ^{あり}ら有^{あり}難^{なん}き御^ご誕^{だん}や
と、三^{さん}人^{にん}齊^{せい}しく跪^{ひざまづ}き、忝^{はづか}しくも令^{れい}狀^{じやう}を、押^おし戴^{いた}きて成^{なり}經^{つね}は、嬉^{うれ}し涙^{なみだ}
に袖^{そで}濡^ぬれて、聲^{こゑ}も震^{ふる}へてさらくと、讀^よみ給^{たま}はぬ形^{かたち}勢^{せい}を、康^{かう}頼^{らい}執^{しやく}り
てやうくに、讀^よみ上^あ給^{たま}ふ趣^きは、^中此^{この}度^{たび}中^{ちゆう}宮^{みやう}御^ご産^{さん}の御^ご祈^き禱^{たう}に、非^ひ常^{じやう}の
大^{だい}救^{きう}行^{かう}はるにより、鬼^き界^{がい}ヶ島^{しま}の流^{りゅう}人^{にん}の中^{ちゆう}、成^{なり}經^{つね}康^{かう}頼^{らい}を救^{きう}免^{めん}すと、
讀^よみ給^{たま}ふ時^{とき}俊^{しゆん}寛^{くわん}は、呀^{あつ}と驚^{おどろ}き頭^{かうべ}をあげ、何^{なん}とて某^{その}の名^なを讀^よみ落^おし給^{たま}
ふぞと、言^{ことば}葉^は急^{せき}しく尋^{たづ}ぬるに、康^{かう}頼^{らい}も打^{うち}驚^{おどろ}き聲^{こゑ}うるみ、實^{じつ}に訝^{いぶ}しき

旅 順 口

事なれど、御名は更らに見え侍らす(中畧)俊寛とも僧都とも書ける
文字は更になし、地こは又夢が幻か、夢ならば覺よくと宣ひて、切獨
り涙にくれ給ふ。たま

旅 順 口

皇の御稜威輝く光には、枯れく伏せる滿韓の草木もなか生さ
ざらん、しうこ醜凝りに凝る露とても、いかに朝日に消えざらん、去程に
日露の交渉破れしかば、忝くも畏くも、地變開戦の詔をぞ下し給ふ、爰
ちちろ かうせよ かたじけな かしこ ないせん みこと のり くだ たま さるほ

に海軍中將に、東郷平八郎と聞えしは、海に名を得し勇士にて、三
笠朝日を初めとし、山と見違ふ艦艦に、朝汐白雲霞など、早り切つ
たる勇敢の、水雷艇より成りたてる、十六隻の艦隊を、率ひて舳艫
相ふくみ、八重の潮路を押渡り、旅順にこそは進まる、切旅順にこ
そは進まる、たま

川 中 島

地 川中島 天 文 二 十 三 年、秋の最中の頃かといよ、地上杉謙信は、八千餘騎を従へ

月下の陣

て、川中島に打つて出づ、我此度の戦は、武田信玄を追詰めて、親
 しく雌雄を決せんと、渦巻かへす犀川を、渡りて、陣をぞ取りにけ
 る、信玄は此事を聞より早くも、二萬餘騎にて打ち迎ひ、中千砦を固め
 て戦はず(中畧)其夜の中に軍勢を、纏めて出る月影に、道を求めて
 遙々と、我が故郷に歸りけり、我が故郷に歸りけり。

月下の陣

宵の篝火影失せて、木枯吹くや霜白く、夜は更け沈む廣野原、中千駒も

月下の陣

蹄をくつろけず、音なく牙ゆる秋の月、草葉の露は玉を縫ひ、夕べ
 果敢なき秋風も(中畧) そいろに思ふ故郷の、雲井遙かにかゝる月
 國を思ふの誠心に家をも如何で忘るべき、只だ身一つを亡き數に、
 入る西山の月影を、水に結びて明日は又駒の手綱をかい繰りて、敵
 營さして慕進、花々しくも戦はん、夜はほのくと明け渡り、星も
 隠れて横雲は、茜にそめて朝ぼらけ、嘶く駒の勇ましく。

本能寺

本能寺

地 麻と亂る、戰國の、人としいへば誰も皆、馬を養ひ兵を練り、糧を
 收めて劍を磨す、頃は天正十年夏五月、徳川家康封せられ、安土の
 城下に入りしかば、織田右大将信長は、いと鄭重に迎へんと、直に
 惟任光秀に、饗應の役を命せらる、御請いたせし光秀は、亂れたる
 世に心得し。都の手振り見せばやと、さしも目出度勤めしを、小人
 輩の讒により(中畧) 地變 右大将とも仰がる、身の信長は、疎暴の振舞

本能寺

新作琵琶歌終

いと多く、或時は蘭丸をして、光秀の頭に鐵扇加へさせ、又或時は
 好まぬ酒を殊更に、我意を透してすゝめしめ、志賀の都の領地さへ
 三年の中には事なくも、奪ひとられむ説を聞き、燃ゆる思ひの光秀
 が、拳を握りて立ち上り、動く眼の間より由々しき大事のはの見え
 いを、露程知らぬ信長は、諸將を安土に留め置き、自ら近臣百餘人
 率き從へて京都なる、本能寺にぞ入りにける。

大正二年六月十五日印刷
大正二年六月二十日發行

(定價金八錢)

著作者

二葉散史

發行者

天野重助

不許複製

新作琵琶歌與付

印刷所兼

岩見米三郎

東京市左衛門町一番地

發行所

東京市淺草區
福井町一ノ四三

三盟舍書店

獨奏自在
掌中音譜

琵琶歌妙曲集

定價金二十五錢

郵稅金四錢

本書は増補以來益々好評を博しつつあり、苟しくも琵琶に親み有る人は是非一本を求められよ。

第三版新作増補

明治天皇、乃木大將、

木村兩中尉
徳田

乃木大將
唱歌

武士道の華

定價金五錢

郵稅金二錢

忠勇義烈武士道の華とも云ふべき乃木大將の一生を一冊六九にて歌へるもの學生諸君
好の良書ツイオリンにも適す、歌へよ歌へ求めよ、武士道の華をば

274

169

心清陰作歌
竹季晴作曲

●文部省檢定濟

快樂文庫第一篇

吉田奈良丸

桃中軒雲右衛門

浪花節

▲定價金八錢

▲郵税金二錢

次目容内
殿中刃傷
大高源香
孝子正宗
赤垣源藏
玉川喜芳
村上伊助
前原庄八
柳川伊八
幡隨院長兵衛
中山安兵衛
杉野十平
神崎與五郎
南部坂雪の別れ
越後傳吉
文覺上人智の瀧
其の他各種

快樂文庫第二篇

新作琵琶歌

▲定價金八錢

▲郵税金二錢

次目容内
明治天皇
乃木大将
木村中尉
徳田兩中尉
廣瀬中野佐
春日野丸
石川櫻本
王昭君
能中藏
寺狩白虎隊
野島松の丸
其の他各種

終